ふえる国民の負担

保険法改悪案　保険医は役人におさえられる

いま国会で審議されている「健康保険法の改悪案」がもし成立したらどうなるのでしょう。大阪府医師会、大阪府保険医会では「これは決して保険医だけの問題ではなく、国民全体の大問題なのです」とつぎのように説明しています。

(1) 医者にかかつたり入院したりするのに、今までよりもつとお金がかかります。皆さんが医者にかかる時、最初に医療代の一部として百円払わなければならなくなります（今は五十円）。

△今までは何も出さなくても入院出来ましたが、これからは一カ月約千円も三カ月間支払わなければ入院出来なくなります。

△医者の方は、政府が今まで医者に支払つていたお金の中から皆さんが余計支払う分だけ差引いて支払うのですから別にみ入りがふえるわけではありません。△今度の改悪案は、当然今までなら政府が支払わねばならぬ分を患者が代りに医者に支払う制度なのです。

(2) 法律が改悪されると、医者にかかつても、ぼんやりしていると罰金をとられ、前科者にされます。△今までは働いている場所に役人が来て調べるだけでしたが、これからはいつ、いかなる場所にでも役人が来て、医者に打つてもらつた注射や、もらつた薬を調べ患者が忘れてしまつて役人の質問に答えられなかつたり間違つて答えると「役人の質問に答えない」とか、「ウソを云つた」とかで罰金を取られる破目になります。

(3) 保険医は役人に首を押えられて、思うように良い治療が出来ないようになります。

△今までは保険医になるには民主的なやり方で「医者自身の同意を得て」決まり、保険医は自由な姿で開業して来ましたが、これからは「二重指定」という複雑な方法で制限し、役人が自由自在に保険医の開業をやめさせて病院勤務の医者にしたり、山間僻地に流したり出来るようになります。だから保険医は患者のことよりも役人のご機嫌を取らないと、やつていけないようになります。△今までは医者が患者を診た分を政府に請求すると民主的な審査会で審査をして金（治療代）を支払つておりましたが、これからは役人の審査ばかりにして思うように減点し、実際に治療した分でも払わないようにできるので、保険医は良い治療をすることができなくなります

(4) 患者さんをはじめ医者や看護婦の基本的人権を踏みにじろうとしています。△役人はいつ如何なる時でも医者の所にふみこんでもいいことになつており、もし、看護婦が診察所に入ることを断つても、また、役人の質問に答えなくても、その診察所（病院）はつぶされます。

(5) その他いろいろ皆さんに不利益なことになります。△今までは自分が養つている、おじ、おば、めいや親類の子供なども保険証で医者にかかれたのが、これからは三親等内でないといけないことになり自分が住込み勤務などで別世帯になると女房、子供、親、兄弟でも保険でかかれなくなります。△今まで保険料を払つて六カ月経てば、たとえ病気などで会社をやめても引続いて健康保険でかかれたのが改悪されると一カ年間保険料を払つていないと、その資格がなくなります。△月給が四千円以下の人でも全部四千円なみの保険料を払わないと健康保険でかかれなくなります

（大阪発＝機関紙通信）

検閲をめぐる三つの時代

検閲といういやな言葉を、また考えねばならない世の中になつたのだろうか。しかし、例えて「踊子」の〃あたいは男にいわれると〃云々の広告文句をみると映画としてどういうつもりで作つたのか根本的に考えねばという気もする。検閲だけにおびえている間に、そういう面も考える必要がある。利潤追求だけを目的にした映画が年に五百本もつくられたり、子供にみせてどうかという作品がでてくるような現実をみると、検閲に賛成する意見も判る気がする。しかし、そのために映画に真実を追求しよう、自由、平等、博愛を求めようという仕事ができなくなつては大変だ。製作者も批評家も考えるべき問題だと思う。私は戦前から約七〇本の作品をつくつたが、大きくひつかかつたのに「春のめざめ」「生きとして生けるもの」戦後GHQの検閲にかかつた「今ひとたびの」の三本である。

戦前の検閲は風俗面に重点があつた。当時私の作品「村の花嫁」の中で二つひつかかりそうな問題があつた。ひとつは軍隊の模範兵を痛烈に描いた。この模範兵のくだらなさは、検閲を通つてしまつたが、もうひとつ強姦されて不幸になつた女の描写は、朝になると砲がひとつ、クローズ・アップでうつるという暗示だけなのに、カツトされてしまつた。〃そうしないと主人公の女が不幸にならないんだが〃と説明したが、駄目だつたその頃の検閲は内務省警保局がやつていた。映画会社の方はカツトされるより押えられて封切れないと困るので、専門のタノミ係がいて検閲官にたのんだりしたものである。何しろ腰巻をだしてはいけないという。走ればみえるものなので、困つたものだ。

東条時代の戦争中は、私はもう仕事をしなかつた。十年間に「五重塔」他二本しか作らなかつた。しかし映画が政治に押し流されてはいけないと心の中で思つていた。それに当局だけでなく、民間の集団体とかいつた勢力があつて「アレは怪しからん」と投書したりする。こういう圧力が当局を動かしたりしたものだ。お妾と少年の恋を描いた「春のめざめ」にこの苦い思い出がある。私の母は実は妾だつたので、妾だつて人間なのだという主張をだして、自分ではうまくできたつもりだつたが、検閲が許さない。とうとう合同検閲＝合検というのがおこなわれ、タイトルその他をかえて出すことになつた。これはぼくとしては残念な思い出である。

戦後「今ひとたびの」でGHQの検閲にぶつかつた。この映画の中の田中というコムニストの戦争中の愛情を扱つたものだが、その中で友人が「だんだん田中のいうような世の中になつたなあ」というつまり田中のいつたような軍国主義になつていつた、というのであるが、これがコムニズムを肯定しているから怪しからん、ということになつたのである。その後、検閲というのはなくなつた筈なのだが、しかし今日また、真実の追求、表現の自由をおびやかされては大へんだと思う。（五所平之助映画監督）【国民文化会議映画部会の講演から】

長屋太平記　中村かめお

二月例会作品抄

四山俳句サークル

田中津根を

寒のりの値が張り麦の芽は伸びず
風花のありそめし沼明るさ増す
馬鈴薯植えの落日刻む畝高に

磯尾祥松

坑口の債鬪のビラ北風まとも
竈の背をよじるてんとう虫の意志
不知火よ燃えよ貧しき母と吾に

上田圭浪

晴る〻鉱夫競馬枯木標を一線
悔は常に曇天に舞う馬券くず

枯山や無軌道に生き徒食の弱　清本はるき
春浅し鉱夫の路擦地を汚す
大寒の多良獄響し豁然と

谷口周

冬トロツコ主婦等が粧ふ谷間の灯
洋酒瓶尻に飾りて冬山へ
散る山茶花鉱区の下に石炭無し

林肯栗子

誤解ある別れの涙炉にひかる
父生きてをり果しなき夢の枯野に

吉村綾子

駅伝のコースの下見春時雨
冬日射し我をふんわり包みけり

田中末草

ひの霜や昇坑り坑夫をとゞまらす
寒灯や家計簿汚す赤き色
水仙や妻と距てし坐の暗く

入江鴻史

寒の水うまし炭塵の胸ぬらしつゝ
冬涛音夜勤へペダルがすがす踏む
冬雨にネオン正しく点滅す

（三作文学より）

北風

平島一男

過去の傷眉間にリンゴ磨き売る
一筋に火ばしれる声水に臥す
波一日刃を研ぎ吊し柿ちぢむ
たき火の輪離れし一人竈崩す

霧月夜

井手口富子

霜なぎの光の中のパセリ摘む
菊匱きし卓に頬よせ文を読む
文書きし指が冷たくなる夕べ
指先が冷たくものを考ゆる

―替え唄―　ヒット曲集

三橋美智也

住宅難の国民から

（元唄、リンゴ村から）

おぼえているかい選挙の時を
公約してから幾年過ぎた
都にまた建つでつかいビルを
見るたび思うよ
俺らのナ　俺らの家を

みんなが怒つてる値上げ

（唄、あの娘が泣いてる波止場）

税金下げるんだとさ
運賃上げるんだとさ
いくら下げても上げれば同じ
大臣なんかにやわかるもんかと
月給袋を見ながら
ああみんなが怒つている値上げ

映画

暴れん坊街道

封建時代の因習をつく

近松門左衛門の名作浄るり狂言「丹波与作待夜小室」を依田義賢が脚色した「重の井の子別れ」の映画化である。丹波の国由留木の城の家老、稲葉幸太夫の娘重野（山田五十鈴）は行儀見習いのため御殿へ奉公中、奥小姓をつとめる与作（佐野周二）と恋仲となり、与之助（植木基晴）という男の子までもうけたのが災わいで、御殿での不義の行為として城を追われたのだつた。

由留木の城にときならぬ姫の産声が上つて城中の歓声は松の枝をも動かした。早速の心配は乳人であつたが、一番家老本田弥左衛門のはからいで重野にその重任がかせられた。幸太夫は、お城を汚した不義ものと一度は固く辞したが、弥左衛門の再度の推めに感激の幸太夫は、姫と不義の子与之助が乳兄弟では面目ないと、重野母子の縁を断ちきる心をかため「お家のためじや、是非はない、死んだものとあきらめろ。与之助は明朝黒親の下に送る…よいな」と云い渡した。

それから年月は流れて十余年、与作はいまは一介の浪人もの、あの時の与之助の行方を求めて旅から旅、今日もまた村の里にききまわつていた。

成長した与之助は三吉と名乗つて馬方になり、放浪の旅に出た与作とめぐりあう。与作はひかれひかれて三吉が姉としたう小まん（千原しのぶ）のいる宿場にたどりつく。

みなし子三吉を、わが子のように可愛がる小まんも、真の父親与作の愛情には勝てなかつた。そぼくな与作の心情は、日々に小まんの胸をゆすつて、幸せな三人の暮しがつづき、与作は刀を捨てて馬方となつた。

この宿場に珍らしい行列が上つてきた。それは丹波の由留木家の行列であつた。三吉がもてあそぶ道中双六が縁で姫の守役となつた三吉は母とめぐり合うが重野は乳母の身、母と名乗ることもできずむせび泣くのだつた。小まんの父が年貢の五両に困つているのを知つて行列の本陣から錦袋の守り刀を盗み五両の金を工面するがそれがばれて三吉は捕まる。三吉を助けるために与作は腹を切つて身代りとなる。三吉はそこで与作が父であることを知る。重野は「親子がとだてられて、こんな憂目になるのは恋した罪というが恋をして子をもうけてはならぬのか」と悲憤の涙をぶちまけるのだつた。ところがこの映画の中心であると思うとにかく山田五十鈴、植木基晴（千恵蔵の息子）の演技は見事なものである。（敏）

三月六日東映で

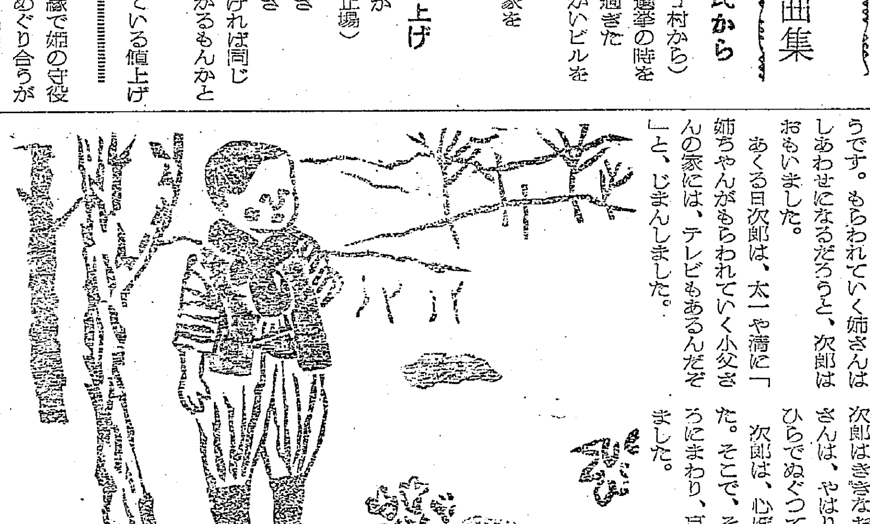
【どうわ】ふくじゅ草

島野とおる作　高頭祥八え

それは、雪の深い北国に、ようやく春がおとずれるころの話です。

ある日、次郎のうちに、知らない小父さんがたずねてきました。十六になる姉さんを、もらいたいということでした。その小父さんの家には、へやが十もあつて、テレビも、スクーターもあるのだそうです。もらわれていく姉さんは、しあわせになるだろうと、次郎はおもいました。

あくる日次郎は、太一や清に「姉ちやんがもらわれていく小父さんの家には、テレビもあるんだぞ」と、じまんしました。



「その小父さんつて、東京の人だつペ」と清がききました。

「うんだ」

「だまされるな、村に人買い鬼めが二匹もさきりこんでるそうだぞ」と太一は次郎に耳うちしました。

次郎も、人買い鬼のことは、きいて知つていました。でも、あの小父さんが、その鬼だとはおもわれませんでした。なぜなら、小父さんは、立派な洋服をきているし、ことばもていねいだつたからです。人げんを買つたり、さらつたりするほどの悪い鬼であるなら、目玉がむきでていて、赤いひげをはやし、ちよつとすると角をもつているかも知れない、と次郎はかんがえていました。

「金の時計をもつている小父さんが、まさか……」と、いいかけて次郎は、口をつぐみました。お父さんや、お母さんが、たいへんかなしそうにしているのを、ふと、おもいだしたのです。

次郎は、家に帰つてお母さんにたずねました。

「あの小父さんは、人買いの鬼めかい」

お母さんは、だまつて涙を手のひらでぬぐつていました。

「ちがうね。いい人だよね」と、次郎はききなおしましたが、お母さんは、やはりだまつて涙を手のひらでぬぐつていました。

次郎は、心ぼそくなつてきました。そこで、そつと姉さんのうしろにまわり、耳に口をあてていいました。

「あの人は、人買いの鬼めかい。姉さんは買われていくの」

小父さんがもつてきた、きれいなきものをきた姉さんは、だまつてうなだれるだけでした。かなしくなつた次郎は、姉さんの好きな「ふくじゅ草」をせんべつにおくろうとおもいました。裏山にたくさんのひみつのばしよをもつている次郎は、かけるようにしてさがしてあるきましたが、その日にかぎつてなかなかみつかりませんでした。雪と泥にまみれて、ようやく二かぶみつけたときには、もうだいぶ時間がすぎていました。笹のはでていねいに根をくるむと、一目さんにかえつていきました。が、家にはもう姉さんはいませんでした。姉さんと小父さんを乗せた馬車が雪でおおわれた松林の道を遠く走つていくのがみえました。

…次）
…イズ発表

応募七十一　正解六十八

大川内監事に、ちゆせんして頂き次の五名が当選です。

（第一問）赤＝六本　黒一本　青二本　白四本　黄三本　緑二本

（第二問）＝(3)×(3)＝(9)